

犀生室

室 生 犀 星

新潮社版



日本文学全集 16

室 生 犀 星

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／大日本印刷株式会社 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替いたします Printed in Japan 1967

中央図書館蔵書

目次

あにいもうと

五

舌を噛み切った女

三

杏　　っ　　子

七

かげろうの日記遺文

三九

注　　解
年　　譜
解　　説

五三

五七

五三

福永武彦

室生犀星

あにいうと

赤座は年中裸で磧で暮らした。

人夫頭である関係から冬でも川場に出張っていて、小屋掛けの中で秩父の山が見えなくなるまで仕事をした。まん中に石でへり取った炉をこしらえ、焚火で、寒の内は旨い鰯の味噌汁をつくった。春になると、からだに朱の線をひいた石斑魚をひと網打って、それを蛇籠の残り竹の串に刺してじいじい炙った。お腹は子を持って撥ちきれそうな奴を、赤座は骨ごと舐っていた。人夫たちは減多に分けて貰えなかったが、そんなに食いたかったらためえだちも一網打たらどうだと、投網をあごで掬って見せるきりだった。

赤座は蛇籠でせきをつくるのに、蛇籠に詰める石の見張りが利いていて、赤座の蛇籠といえは雪解時の脚の迅い出水や、つゆ時の腰の強い増水が毎日続いて川

底をさらっても、大抵、流失されることがなかった。石積舟の上で投げ込む蛇籠の石を見張りしている彼は蛇籠の底ほど大きい石で固め、あいだに小型の石を投げ込ませ、隙間もなくたたみ込むように命令した。

投げ込む石はちから一杯にやれ、石よりも石を畳むこちらの気合だと思え、ヘタ張るならいまから襦衣を干しかえれ、赤座はこんな調子を舟の上からどなりちらしていた。ためえの禰は乾いているではねえか、そんな禰の乾いている渡世をした覚えはないおれだから、そんな奴はおれの手では使えない、赤座はそんなふうで人夫たちの怠気を見せる奴をどんどん解雇した。朝日が磧の石をまだ白くしない前に、いつもその日の人夫たちの出足を検べ八時が五分遅れていても、「なあ、おれにもお法度があるというものじゃないか」

そういうと仕事の割宛をしないで、その日はそんな人夫を使おうとしなかった。道具をかついで人夫は磧から土手へ、土手からいま出て来たばかりの家へもどらねばならなかった。そんな奴をふりかえりもしないで、七杯の舟に石積みの手分けをし、蛇籠止の棒杭を

打つものを裸で水の中へ追い込み磧では蛇籠を編む仕事をひと廻り查べると舟を淵の上にとめて水深に割宛てられる蛇籠の数をよんでいたりした。そういう赤座の持舟のなかに長い竹の柄のついたヤスが一本用意されてあつて、新鰻が泳ぎ澄んでいて、水とおなじ色をしているのを目にいれると、そのヤスの柄が水深一杯にしずみ込んでゆき、さらに五寸ばかり突然にぐいと突きこまれたなと見ると、嘘つきのような口をあけたぎちぎちした鰻のあたまたの深緑色が、美ごとな三本の逆さ鉾の形をしたヤスの尖をゆすぶりながら刺されていた。その尾のさきで腕ッ腹を叩かれたらしびれて了うといわれた川鰻も、赤座の拳でがんと一つ張られると、鰻は女の足のようにべつとりと動かなくなるのであつた。

人夫たちは川底の仕事ですら胡魔化しが利かずに、赤座の眼の中の水をくぐり呼吸を吐きに浮び、また水の中にもぐって行つた。若葉の季節は水の底もそのように新しい若鮎やはぜや、石まで蒼む快いしゆんであつたから、赤座はかんしゃくを起すと自分も飛び込んで行つて、人夫のからだを小づいたり頭を一つひつ

ばいたりして瀬すじを絶つ工事に一番かんじんな底畳みに大きな石を沈ませるのであつた。水の中ですら赤座の囁声が歇まずにどなり散らされた。どんな速い底水のある淵でも赤座はひらめのようにからだを薄くして沈んで行き、水中の息の永い事は人夫達も及ばなかつた。人夫たちは水の中で怒つた形相をこわがったが、水の中からあがると何時も機嫌がよかつた。川のぬしであるよりも、自分でつくつた池くらいにしか、川の事を考えていなかった。

小屋掛に月に二度の銭勘定の日には、赤座の妻のりがたずねて来たが、これはみんなから嬪仏といわれるほど、ゆつたりと物わかりのよい柔和な女だつた。りきはいつも赤座をあんな人だからあんな人と思つてつき合つて下され、いくらそこから云つたつてだめだから聞きたくないことは聞かなくともよいからと、てんで赤座をあたまごなしに説きふせているが、赤座はりきにかまいつけないで、ふんとか、うんとか、それだけ言葉みじかに返辞をするだけだつた。銭勘定は磧仕事には稀らしいくらいきれいに支払われ、客な端たを削ることなぞしなかつた。りきが請負の後払いを先

に廻すことに人氣を得て、勘定日にせんべいやお芋の包みを持って土手のうえに姿をあらわすと人夫たちはみんな手を振って迎えた。お茶の三時にはりきを取りかこんで荒男たちが元氣にべちゃくちゃしゃべり、りきの手から貰う金を着物に入れたり手拭につつんだりして、積が一杯に声をそろえて、賑うてくるのであった。赤座はりきから報告をきくだけで、金のことは永い間の習慣で、委せきりであつた。赤座は仕事だけをしに來ているようで、用事のない三時にも積と積を二分している流れとを、見つめているにすぎなかつた。日光の中で仕事をしつづけている人間は、眼の中にまで日焼けがしているごとく赤座の眼もそのようであつた。そのような眼はただ川仕事をするだけに生れついでいるようであり、雨つづきの出水の日にもわざわざ出場まで行つて、濁つてぶつぶつ泥を煮ている川水を眺めていた。そんな時に濁つた赤座の眼は悲しそうにしぼんで、濁流のなかに注ぎ込まれているようであつた。繋いである舟は岸とすれすれに波に押し上げられ、小屋はきれいに流されてしまった泥波の立つた積は、赤座なんぞのちからや命令がどんなに仲間のあい

だにはばが利いても、出水の勢いには叶わなかつた。七つの時から積で育ち、十五で一人前の石迫いのでき、蛇籠の竹のささくで足を血だらけにして育つた赤座は、出水の泥濁りを見るたびにおそろしいもんだなあと、思うが、どうしてそんな出水が恐ろしい百数十本のせぎの蛇籠を押し流してしまふかが分らなかつた。二十ころから一本立になつても蛇籠のこしらへは一年ともたないで流されてしまふが、やと川底の分だけはいつも残つていてそれだけでも仲間では「赤座の蛇籠」としてほめられていた。

赤座はりきが勘定をすましてかえろうとすると、
「もんちは帰つて來たか」

と、感情をあらわさないで、なんでもないことをそういうように聞いた。

「かえつてこないんです」

「伊之助は仕事に出たか」

「あれきりふて寝しているの」

「もう用はないよ」

赤座はそうききいうと、持場についた人夫たちのほうに向いて歩き出した。肥つた赤座は肥つた人がど

っしりと歩くくせがあるように、磧の上に遅しいからだを搬んで行った。

赤座には三人の子供があった。子供は子供であるが、長男の伊之は二十八になり石屋に年季を入れ一人前になっていたが、怠者のうえに何処でどう関係をつけるか、しょっちゅう女のことと紛糾が絶えなかった。渡りの利く石職工でも伊之は墓碑の文刻に腕が冴えていたから、克明にさえ働けば金になったが、一週間か十日間も働きつめるとその金を持ったきり、二三日は帰って来なかった。妹のものの言い草ではないが浅草あたりの電車や自動車がごとく鳴って聞えるのでしようと云っていた。三日も経ってかえると又仕事を初めその金が手にはいると、またすぐ出掛けて了うのであった。りきの叱言などてんで耳に入れず、赤座は日が暮れなければ仕事からかえらないので、晩は皆く親父と顔を合すことを避けて外に出ていた。

伊之の下に妹が二人いて姉はもんといい、みんなから愛称をもんちと云われていたが、下谷の檀塔寺に奉公しているうちに学生と出来てしまい、その子供をばらむと、学生は国にかえってしまい文通はなかった。

ぐれ出したもんは奉公先で次から次と男ができ、こんどは小料理屋や酒場をそれからそれと渡り歩いて半年も帰って来なかった。帰って来ると乱次なく寝そべって何かだるそうに喘いでいるような息づかいで、りきをあごで使っていた。りきは口叱言をいいながらも、この子はずまらないことで苦勞しているが、いい加減にしないかといいい、半分は顔を見るのも厭そうにしながら、半分はきつく憐れがって食べたいものを作ってやり、睡れるだけ睡らして置くのだった。実際、もんは睡足りたということもないほど顔が真青になるまで睡っていた。りきはそんな草臥れがよく解る氣持がし、兄の伊之が外泊りでかえってくると、やはり終日打通しでからだに穴の開くほど睡っていた。かれら兄妹は起きると、目をほそめ未だ草臥れののこる懶るいからだを片手でささえながら、母親の手まめにうごく姿を珍らしくもなく眺めるだけであった。伊之はこの母親が死んだらこの家には居られないと思うときだけ、りきが働きつめて打倒れでもしなければよいがと、母親の顔をちよつとの間身にしてみるのであった。だが、そんなことはその間だけですぐ忘れてしまった。

もんはこんなことを云ってそれが一番肝腎^{かんじん}なことであるように、

「お金の心配だけはさせないわ」

と、母親にいうのであった。

漸^{やう}と一年も経って学生であつた小畑が赤座の家にたずねて来た時は、もんは五反田の何処かに勤めていたが、例によつて所番地は知らないので尋ねようがなかつた。その代り月にいちどは帰宅するからというのだ。りき一人でこの問題の解決のしようがなく、積^つの出場^{だう}に行つて赤座にこの話をした。赤座はだまつて小屋から出ると、りきと一しよに土手の上に登り、土手づたいに近い自宅へいそいだが、りきは対手が若い学生のことであるから手荒なことをしないでいてくれるように云つた。

「多分、子供の始末をつけに来たんでしよう。まだ、子供が生きてるとでも考えているのじゃないか知ら」

「すれた男に見えるか」

「まるで坊ちゃんです」

赤座は小畑と対^むき合うたが、赤座の体質風貌の威圧で小畑はすぐものがいえない風であつた。赤座は單的

に用件を手早く云つていただきましよう云つたきり、むつつりと黙^{だま}り込んでしまつた。小畑は今まで打つちやつておいて上れた義理ではないが、国の親父に禁足同様にされていて抜け出す隙^{すき}がなかつたのだと云つた。こんど上京していろいろの費用を負担させて貰い、それを自分だけの良心のつぐないにしたいと云つたが、肝腎のもんと一緒になるとか、もんに逢わせてくれとかいうことを一言もいわなかつた。却つてもんがいないのがこの男に都合のよいごたごたを避けさせているように、赤座もすぐ見ぬいて了つた。も一つ弱そうな学生あがりに見えるこの青年の実直^{じち}そうな容子^{ようす}とは反対にこういう男だから一年の間どんな手紙をやつても、返辞一本出さずにいる根気よさと、つつ放しの腰をすえることができたのだと、蒼白^{そうはく}い惻巧^{さくこう}そうに覚悟をきめてしゃべっている小畑を、こいつ馬鹿でない掛合をもつて来たと思つた。

「子供は死産でした。もんはあれから、やぶれかぶれです」

赤座はこれだけいうと、驚いて眼をきよんとさせた小畑につつま切れない面倒くささから脱^だけたほつと

した氣持を感じることができ、赤座にはそれがすぐ分
つて野郎やう旨くやりやがったと思い、遠い多摩まで足を
搬たんだ甲斐があつたらうと、そう彼はだぶだぶの腹の
中で思った。おもんさんはいま何処にいたのでしょ
う、よかつたら居所を知らしていただけないのでし
ょうか。僕はあやまりたいことも沢山たまっている
ので、それをあやまってさっぱりした氣持になりたいの
ですと、勢いを得た妙な昂奮した語勢で小畑は云つたが、
赤座はこの青二才いい氣になつていると、見え透いた
彼の安堵した氣持が、頭をあおつて来た。もんの腹に
子供があるときから聞いた時のぐらぐらした厭な氣
持をもてあつかつたあの時分の、磧仕事の出場の不機
嫌を蹴散らすことができずに、どれだけ小者人夫に拳
や頬打ちを食わしたか分らなかつた。赤座は狂れてい
るのじゃないかと蔭口を叩かれるほど、そこらに氣持
をおちつけるところがなかつた。

もんは奥の間で寝たきりであつた。娘がハッキリと
誰かにおもちゃにされ負けて帰つて来たと、考えると、
負けたことのない赤座はもんの顔を見たくもなかつ
た。道楽者の伊之はあなることは始めから分り切

っていることだ、だからおれは家から女を放すことは
危ないと云つたのだと、りきを暇さえあればいじめ
た。りきはいじめられたきりで黙っていたが、伊之が
時々汚ない物をひっくり返すようにもんの寢床に立ち
上つたまま、大方、にやけ野郎にベタついて、子供時
分のよだれをもう一遍垂らしやがったので、臍の上
がせり出したのだらう。狗だか鵲だかわけの分らない
ものをひり出す前に、何とか、慇巧にかたをつけたほ
うがいい、羅紗らさくさい書生しやうほのヒイヒイ泣きやがるガ
キの卵の夜啼よなきなんぞ聞くのはまッ平だと、頭痛で氷で
ひやしている枕上でどなるので、りきはわざわざ伊之
にあんまり口がすぎるよ、お前の知つたことじゃない
から此方に来ていてくれと云つても、近頃外の女との
間のうまく行かない伊之は何の腹いせだか、怒鳴るこ
とを止めなかつた。親身の兄妹のにくみ合う氣持はこ
んなに突ッ込んで悪たれ口を叩くものかと、母親は憫
れてものがいえないくらいだった。伊之は続けさまに
その顔つきでいちゃつきやがったかと思うと、おら、
へどものだ、しかも対手の野郎はてめえより十倍がた
りこうと来ているから、舐しゃつてしまつたらあとに用の

ない女と随徳寺^{ずいとくじ}をきめこんだ、全く年中そのつらを見ている奴もたまらないからなあ、名前もいわなければ国のところもいわず野郎は野郎でうんともすうとも云ってこないじゃないか。そんな野郎をかばいやがっていとしがるなんてこん畜生ア、まったく惚れたんだか抜けやがったんだか知らないが放図^{はなず}のないあまच्चよさ、腹ん中の餓鬼がどんどんふとりやがって凶に乗ってほんと飛び出した日にゃ、世間じや誰あつて対手^{たいて}にしてくるものはなしさ、餓鬼をつれて土手から乗合に乗って東京のまん中へでも行つて、どこかに蛙^{かえる}のようにつぶれてしまふかしなければおさまる代^{しろ}ものじゃないと、自分で調子づいて毒舌^{どくぜつ}の小獣^{こじやう}みもなかった。りがが止めると又カッとなつてお母^{おはは}もお母^{おはは}あじやないか、こんなしたたか者を生みつけておいていまさらおれの口をふさごうなんて、女らしくもないことさ、妹のさんのことをおもうとおらさんが可哀そうなくらいさ、——伊之は末の妹のさんが生^きまじめに奉公先にいて時々履物^{はきもの}なぞをみやげに持つてかえることを、ほめていうのであつた。さんの話が出るとみんな黙つてさんのことを考えていた。あんな温和^{わんわ}しい子供もいる

のに、伊之よ、お前のように仕事もしないで朝から父さんの米さ食べてががが云つてゐる人もゐるんだ、怒つていいときとわるい時とがある、いまは、もんをとツつかまえて怒るときではないのだもの、怒つてよかつたら父ッさんに怒つてもらえばいいのだ、父さんはだまつていなさるのだもの、皆もだまつてもんをしづかにしてやらんらんじやないかとるときは持前の声のやさしい割に人の頭にくい込むような言葉づかいでたしなめるのであつた。もんはもんで寢床のなかで頭痛で顔をしかめながら、兄さんだつてあひると同じで生み放しておいて母さんにあと口を何時もふいて貰つてばかりいるじやないか。裏の戸口まで女を引きずり込んでいてとうとう父さんに見つかったのを、あたしがふらりと出てやつてさ、そとの女の姿を匿^{かくま}つてあげたときやあ、暗いところで手を合せてお礼をいいたくせに、こんな弱つてゐるあたしを犬の子かなにかのよう^{よう}に暇さえあれば汚ないもの扱いも大概^{たいがい}にして頂戴^{とうがい}、兄さんにたべさしてもらつてゐるんじやあるまいし、何かのくせにぶりぶりして突つかかつたりして、あんまりひどいわ。お腹の方のかたがついたらあたしや費^{かひ}

用はどんなことをしたって償うつもりです、それを機会にもういっさい母さん父さんに心配はかけないわ。だから、わたしのからだに傷がついたのをきっかけに、あたしのからだをあたしが貰い切ってどんなにしようが誰からも何もいわれないつもりよ、父さんだって云ってたわよ、お前はお前でかたをつけろ、そんな娘のつらあ見るのも厭だいやと云っていたわ。だから兄さんからそんな兄さんづらをされたって頭痛がするばかりで何にもこたえないわ。外の女の首尾が悪いからってそんな胆ッ玉のちいさいことで喚き立てると、一そう女に好かれないものさ。

赤座はこういうごちゃごちゃした一家のなかでむんずりと暮らしていたあの時分の弱った氣持を考えると、眼のまゑにかしこまっている涙を垂らしそうな青書生が、娘の對手とは思えない氣もしていた。りがが手荒なことをしてくれるなど云ったが、だんだんそんな氣がしないでこいつも可哀そうなどこの小せがれだと思わずにいられなかった。その反対に歸りに土手の上におびき出して思うさまこん畜生を張り倒し、娘の一生をめちゃくちゃにしたつぐないをしてやろうかとも

考えて見たが、青書生を相手にしていい歳をしてそんな手荒なことが出来るものではなかった。赤ん坊は死んでゐるし娘も満更まんごうでなかった小畑のことだから、そつと歸してしまつた方がいいように思われた。

「もんはあんたに逢いたくもなからうから此儘引き取つて貰いましょう」

赤座はこういうと仕事中だからと、もう立ち上つて土間に降りて行つた。そしてもう一度小畑の方を見ると、赤座は半分しよぼしよぼな顔つきになつて、考えていることの半分もいえないような声で云つた。

「小畑さん、もうこんなつみつくりは止めたほうがいぜ、こんどはあんたの勝だつたがね」

赤座は自分で云つた言葉にすっかり参つた氣持になり、いそいで土手の上にあがつて行つた。晴れつづきの磧がわは、真白に光つてゐるところと、雜草にへり取られた磧がわの隔へだれ隔へだれになつたところと、さらにべつとりと湿つた洲すの美しい鮎あひろいろの肌をひろげたところと、それらの広茫とした景色は光つた部分から先に眼にはいつて行き、迅い流れをつづる七杯の仕事船が蝶ちやうの羽のように白く見えた。もんも伊之も、そしてさんもみ

んな舟仕事のあがりて育てられた。もんや、さんの生れがけの時分は若くて先の優しいとがりを持った乳ぶさを持っていて、弁当のときにはその空をもつてかえるまで乳ぶさをふくませ、摘んで食える茎を抜いていたりしていたのも、そんなに遠いこととは思えなかった。だのに娘はこどもを生み落すようになりその男と対き合っても正直に怒鳴る気さえ起らなかったのは、よほど赤座の心がこういう問題に弱りを見せているとしか思えなかった。りきにしても赤座の応待があんまり鷹揚すぎると、却って赤座自身が早くこの問題から考えをもぎ取りたいとあせっていることさえ、察せられたのであった。あの人もよほど善くなり物わかりがよくなったと、りきはちよつと有難い気持ちにさえなったのだ。手の早い赤座は話の半分から殴ることしか考えなかった。殴ることがしゃべる十倍の利目があるということを、自然に一つの法則のようにしている赤座はりきにものを云うのに、少しの廻りくどさがあるとすぐに殴ることしかしらなかった。りきは殴られ通しだったがその数がすくなくなり、殴られると怖いぞという感覚がりきの頭にかげをひそめてか

ら、だいぶ年月が経っていた。小畑にそうしなかったのがりきには嬉しく、小畑は憎み足りなかったけれど何の考えもなくやったことを、りきは、もんも悪いし小畑もわるいと考えていた。その考えの底を搔ッさらってみるとどうにかした縁のまわりあわせで、もん小畑とが一緒になれないものかとそんなことを考えてみたが、もんはもうじだから、誰もとりつきやうのない女になっていたから小畑にそのことを説くにも、小畑があんまり温和しすぎるので控えられた。りきは小畑を愛したもんの気持がだんだんわかって来るような気がし、小畑がかえって行くのが惜しいような気がした。

「こんど宿さがりをして来ましたら、あなたがおたずね下すたことをもんにそう云いつけます」

りきは母親らしくそんな柔しい言葉さえつい出してしまった。

「そして所を聞いておいて下さい」

小畑は金の包みを取り出し無理にりきの手におさめさせた。りきは小畑を送って出て、この人には一生会えないだろうと考えた。小畑も母親らしいりきに親し

むことが快く感じられたので、ぐずついて直ぐに前庭から通りへ出ようとしなかった。りきが培うた夏菊とか芭蕉とかあやめとかを見ていて、夏咲く菊はどんな色ですかと尋ねたりしていて、変な懐かしさから別れられなそうに見えた。

りきは思わず尋ねてみるのであった。

「あなたはおいくつになるんですか」

「僕ですか、僕は二十四になったところです」

色が白くて神経質な小畑は年よりも若く見えた。もとと出来たのは二十三の春になる、もとと一つちがいにしかならないと、りきは考えた。りきが赤座のところに来たのは二十二の時で、あの時分まるきり女としての赤ン坊とは思えないほど、何も彼もわからなかった。小畑が一年経っても尋ねて来たのは誠意があるからであって、その誠意に気のつかなかった先刻からの自分が迂濶に思われ出した。まったく悪い人間ならいまになってたずねて来るなどという頓馬な真似はしないであろう。

小畑は万年筆で名刺に所番地をこまかく書き入れ、それが自分の住所だからと云った。

「おもんさんに渡しておいて下さい」

小畑はそういうと田圃道を土手の方へ、何度もあいさつをしながら若いせい高いからだを搬んで行った。りきは茫やり見送っていた。

悪い時には悪いもので二三日顔を見せなかった伊之がふらふら帰って来て、眼を細めて小畑を見ていたがもんの男であることを知ると、ひどく疲れて青くなっている顔にかんしゃくをむらむらとあらわした。そして小畑が家を出て田圃道から土手へあがると、りきに見られないように小畑のあとに跟いて行った。小畑も直覺的にもんの兄だなど感じ、その感じが急激に恐怖の情に変わってしまった。伊之はだまって一町ばかりついてゆき、臆て追いついてもきゆうに声をかけずに執念ぶかく、小畑と肩をすれすれに歩いて行った。赤座に肖た伊之の顔は明るい動物的なかんしゃくで揉みくちゃになり、小畑は何時伊之が飛びかかってくるか分らない汗あぶらをにちゃつかず、底恐ろしさに足がすくんでしまった。早く声をかけてくれればよいと、考えても、意地悪な重なる嫌悪に気を奪られた伊之は自分でもすぐに声を懸けられないほど切羽詰って、耳の